

吉本隆明ノート

——「エリアンの手記と詩」

松島 淨

—

吉本隆明がこの「手記と詩」を書いたのは、一九四七年から八年頃と言われている。そしてこの作品は、のちの『抒情の論理』（一九五九年、未來社）の巻頭に、「恋唄」「異神」とともに掲載されている。この時作者はすでに、『文学者の戦争責任』（一九五六年）や『高村光太郎』（一九五七年）や『吉本隆明詩集』（一九五八年）などを出版していた。しかしそれらには先ほどの三つの詩は載っていない。作者はなぜこの段階で『抒情の論理』にこれらの詩を載せたのであろうか。その理由があとがきに書いてあるので、参照してみよう。

「世の中には、生まれ時から革命家のような顔をしているのがたくさんいて白々しくて仕方がないので、何としても初期の作品を収録しなかった。」

つまり『抒情の論理』は作者だけの単著であり、その中には「前世代の詩人たち」などの、批判的な論文が載っ

ていたからである。『文学者の戦争責任』は武井昭夫などとの共著であり、『高村光太郎』は特定の詩人論であり、『吉本隆明詩集』にはすでにあの中の一つの詩が掲載してあった。論争的な論文であればあるほど、自分の出自を明確にしておきたいと作者は思ったのであろう。そこにも作者の誠実な態度が現われている。

私はさきほどから巻頭の三つの詩とひとくくりになっているが、よく読むとそれらの詩は微妙に違っている。まず「異神」は、ほぼ同時代に書かれた作品なので、おおきな差異はないといえる。例えばその最初の「序曲」と題された短歌は

「ひたすらに異神をおいてゆくときにあとふりかえれわがおもう人」

となっている。これは先ほどの「あとがき」の言葉とも共鳴しているとも言える。それにしても吉本隆明の短歌というのはそうそう読めないもので、貴重な作品だと思う。

先ほど、三つの詩が巻頭に掲載されているといったのであるが、この「異神」は、ほとんど同時代に書かれているので、「エリアンの手記と詩」と区別がつかないくらいに重複した作品であると思われる。つまりこの「異神」というのはあきらかに「キリスト教」であり、「わがおもう人」とは「エリアンの手記と詩」に出てくる「ミリカ」であることは明らかである。この短歌の意味について、その後の手記の中で書かかれているので引用しておく。「わたしは貴女の異神を慕って、とうとう天に昇りそうな静かに深い心が羨ましかったのだ。わたしは貴女がふっと寂しく立ち止まって下の方にあえいでいるわたしを顧みる時もあるだろうかと思像した。」

この言葉は次の詩「人間」とも重複しているだろう。

「きはまるところは愛憎のうへに立つ」

わたしは恐れ

わたしはふるへる

誰のためにわたしは生きるだろう

いっさいを失ったあとに

わたしに残るそれはたれだろう

おもへば業の深いことである」

この詩が書かれたのも、一九四七年の秋であった。今氏先生は二年前に死んでいた。

また同時期に書かれたとおもわれる詩「海はかはらぬ色で」の最後はこんな詩である。

「もはや訪ねあるいて

わたしはわたしの身代わりを確かめ

わたしの歳月を告げるあしどりはない

疲れうしなはれた豊かさで

わたしはひきかへす

もはや夜があり

わたしは断たれる

わたしを模倣し

わたしを想い起させるものから――

吉本隆明ノート

吉本隆明ノート

どんな宿命が

わたしを模するものを訪れても

すべなくてわたしは茫然とたち

わたしが亡びるさまを視る

あたかもすでにわたしが亡びたとほりに――

もつれあつたいのちが

そのままおおきく変わってゆき

かへりみることが

もう無用のこととなり

なほつらいことに感じられ

けっしてふりかへることをしない

いくらかはひとをあいすることに

いくらかは生きてゆくことに

ふりわけられて」

わたしはこの詩を吉本隆明が一九四五年三月十日の東京大空襲のときに、深川の門前仲町で塾を開いていた今
氏先生の家が焼失して、ご家族が亡くなったことを知った時の哀しい心境をうたったものと読む。そしてこのよ

うなつらく哀しい想い出の中で、「エリアンの手記と詩」が書かれたのである。これこそ戦争で亡くなった人々への鎮魂歌であり、敗戦と失恋との交響詩であった。いずれも吉本隆明の戦後文学である。

それから「三つの詩」の最初に載った「恋唄」という作品は、「エリアンの手記と詩」から一〇年後に書かれた作品なので、詩の書き方も違っており、異質な作品である。作者はこれで当時の作者自身の「変化」を示そうと思つて載せたのではないかと思われる。興味ある人はその違いを読んでみてほしい。「恋唄」が「荒地詩集」に載っていることでもそれがわかるだろう。四季派から荒地派への移行である。吉本隆明は一九五〇年代の後半に大きく変貌し進化したのである。そのころの成長と発展は驚異的であった。「抒情の論理」の新装でも一〇年間で一七刷されていることでもそれがわかる。詩と詩人と短歌の本で当時こんなに売れた本はなかったと思われる。

それくらいこの「抒情の論理」と同時期に発売された『芸術的抵抗と挫折』の出版はわが国の文壇に衝撃をあたえたのである。

二

本論に入る前に触れておくべきことは、フランスの小説家アンドレ・ジイドのことである。どういふことかという吉本隆明が「少年」というエッセイの中でこんなことを書いているからである。

「今からひと昔前、小林秀雄や河上徹太郎など仏文系の批評家たちは、アンドレ・ジイドやポール・ヴァレリーを盛んに日本で紹介していた。私はジイドの小説が好きでよく読んでいた。中でも初期の「アンドレ・ワルテルの手記と詩」が好きだったので、当時のことを書いたものに、「エリアンの手記と詩」という題をつけた。」

アンドレ・ジイドは一五歳で読書に熱中し、ゴッティエ、ハイネ、ギリシャ古詩などを耽読。特に聖書を精読し、宗教と芸術のなかに喜びを見出す。また信仰と美德とに生きる従妹マドレーヌを慕う。一九歳になると、スピノザ、ライブニッツ、デカルト、ニーチェを読む。とりわけショウペンハウエルを愛読。このころ「アンドレ・ワルテルの手記」を計画し、二年後にこの「手記」を完成する。その年ヴェルレーヌやヴァレリーを知る。二二歳でこの「手記」を匿名で出版し、「ナルシス論」も出す。翌年には「アンドレ・ワルテルの詩」も匿名で出版する。当時のジイドについて仏文学者の若林真が書いている。

「南仏ランドドック地方出身の父親と北仏ノルマンディ地方出身の母親から受け継いだまったく異質な二つの血の混淆。パリ大学法学部教授の父親から感化された合理主義、信仰一途に生きる母親ゆずりのいくぶん頑迷なピュリタニズム。豊かな生活上の安定感と、それへの何とも知れぬ負い目、早熟な性の本能が目覚めてアルザス学院をおわれるほどはげしく荒れ狂うかと思うと、二つ年上の母方の従妹マドレーヌに誠に可憐な思慕の情を寄せる。ルコント・ド・リールの訳でギリシャの詩に感動し、恋人との趣味の一致に歓喜していたのは、ほかでもない聖体拝受の勉強をしていたころの事だった。つまりヘレニズムへの陶醉のさなかで、福音書のなかに愛の泉を探っていたわけである。これが矛盾の人でなくてなんであるうか。」

ここで長い引用をしているのも、ジイドの処女作の難解な内容を理解するためには、このような当時の作者の

思想的な背景の理解が必要だと思ふからである。

さらに若林真は書いている。

「青春の混沌のさなかにあり、しかも生来のナルシスの傾向が強く、宗教的神秘性への感受性の異常に鋭敏な青年が、自画像を描こうとするとき、どういう方法を選ぶだろうか。精選された詩語の結合のなかにも内心のドラマを結晶させるには、あまりにも性急に言葉がざわめきすぎる。また一貫した筋のある散文の物語のなかに一人物を造型するには、自己像の輪郭がぼやけすぎていて、散文による客観化の作業は不可能である。そのうえ彼はまだ詩法も小説作法もじゅうぶんには心得ていない。とうぜんのことながら、そのとき、若いロマンチックなナルシスは、まるで鏡に向かうように、内心の日記を綴ろうとするだろう。その日記には、聖書、文学書、哲学書からの引用句が氾濫し、人間の靈魂と肉体に関する哲学的・宗教的考察が羅列され、音楽的抒情が脈打つはずだ。聖書とアミエルとシヨウペンハウエルの思想、シヨパンとシューマンの音楽の影響がナルシス・ジイドにとって決定的だったゆえんである。」

「アンドレ・ワルテルの手記」を訳者の言葉で要約、解説するとこのようになるのである。そして我々はこの要約と解説がこれから読もうとしている「エリアンの手記と詩」や『初期ノート』の内容分析にもあてはまっているところがあると思ふのである。

ここでこの作品の登場人物を簡単に紹介しておきたい。アンドレ・ワルテルは肉の誘惑をしりぞけ純潔な魂だけを求めている青年である。従妹のエマニユエルを恋い慕い、魂のみによる結婚を夢見ていて、最後は発狂する。エマニユエルはアンドレを愛しながらも、彼の母親の願いをいれて他の男と結婚する。アランはアンドレが構想

している小説の人物である。アンドレの分身であり影の存在である。前述したようにこの作品から小説的なストーリーを読み取るのは大変難しい。

ここで同時代に書かれた『ナルシス論』に触れておこう。私はこれをジイドの同性愛論の一端ではないかと思っている。ジイドはナルシス神話を次のように紹介している。

「ナルシスは申し分ない美男であった。それ故にこそ彼は純潔であった。彼は水精女（ニンフ）どもを顧みなかった―己れ自身を恋慕っていたからである。そよ風も泉を乱さず、そこに彼は静かに身をかがめて、終日われとわが面影に見入るのであった。」

そしてさらに作者はその論の中で次のように語っている。

「分裂した両性具有者―人間は今愕然として悩みとあさましさに慟哭した。ほとんど相似たおのれの半身に対する不安な情欲が、新しい性とともに体内に沸き起こるのを感じたのである。―この女はおのれを通じて再び完全者を創造し、そこに人類を停止せしめようという盲目的努力をもって、胎内に新種族の未知数を動かしめ、やがて時のなかに、今一人の人間をうみだすであろう。しかしこれもまた不完全であり、自足することができないであろう。」

ここで言われている「新しい性」を自己愛と読むかどうかは読者の判断にゆだねたいと思う。

ところでこの「手記」のなかに「イザベル・オト先生」がでてくるのだが、それがなぜイザベルなのかは特に説明がない。そこで私はこれもまたジイドの小説からとられたのではないかと想像するのである。『イザベル』は一九一一年に書かれたジイドの小説である。その内容はトレオール家の令嬢イザベルは隣家の長男の子爵と駆

け落ちの約束をしながらも、直前になって不安を憶え、園丁に告白して、子爵が近づかないようにしてくれと頼む。結局夜忍んできた子爵は園丁によって銃で撃たれてしまう。

この小説を翻訳した訳者の新庄嘉章はその解説の中で、この小説の意図を次のように書いている。「彼女（イザベル）は凡庸そのものである。魂を忘れた女のようにでさえある。彼女は束縛の多い因習的な家から逃れようとする。だが彼女の意志は初めから確固たる素地をもっていない。永久に家を去る決心をしたかと思うと、そのそばから何とも言えぬ不安に襲われて、この未知の自由を恐れるのである。長い間考えに考え抜いたあげくの決意でありながら外に向かつて開かれた扉の前で彼女は立ち尽くす。そしてその困惑に我を忘れて、ついに駆け落ちの約束をした恋人の生命を失わせてしまうことになるのである。なるほどここにおいてもジイドのこれまでの作品の重要なモチーフの一つである〈脱出〉のモチーフがみられないことはない。しかしここでは脱出の欲望は決して作品を動かす強力な衝動とはなっていない」

まずイザベル・オト先生のイザベルがジイドの小説では女性であったことに驚く。しかしこのイザベルのキャラクターが脱出を希求しつつも最後は不安に襲われて自由を恐れる存在として描かれているところが興味深い。つまり作者がそのイザベルの姿を自分の想像力で勝手に作り上げているところは「エリアンの手記と詩」のモチーフとも重なるだけに大変興味深い作品であるといえる。私はこの小説もまた「手記」の中に巧みに吸収されていると思われる。「イザベル」は「手記」の「ミリカ」と同時にオト先生にも反映している。

三

ここで「エリアンの手記と詩」に入る前に再度先ほど読んだ「海はかはらぬ色で」という詩に戻ってみたい。

「人はいつまでも幼年である

たとへいくたの夢がうしなわれ

風や夜が心をしずめなくなっても

面影は古び

深い溝が刻まれても

幼いものはどこかにいる

海辺は形を変えられ

白壁の倉庫が立ち並び

岸壁は堅く石垣でくまれても

かつて砂泥にあり

蟹など砂に住まっていた

少女は小さく愁っていた

海辺は形を変えられても

いつまでもここの孤立のなかに

幼年は在る（海はある！）」

わたしはこの最終行の詩句に感動するものである。そして「エリアンの手記と詩」の第一節のタイトルは「死者の時から」であり最初の詩句は「海よ！」だったのである。「人はいつまでも幼年である、たとへいくたの夢がうしなわれ」でも。だから最初の詩の二連目に

「海よ！」

おまえはそれ以後

わたしから遠く離れていった

わたしはおそろしかった

おまえが！そうして生きることが！」

海は水泳を愛した今氏乙治と吉本隆明の共通の価値ある世界だったのである。海は今氏先生でもあったのである。

だから「面影は古び、深いみぞが刻まれても、幼いものはどこかにある」

東京の下町で過ごした幼年時代の思い出がいかに貴重なものであったか。それがこの四〇〇行以上の長詩の存在によく現われている。吉本隆明がこんな長詩を書いたことはあとにも先にもなかったからである。そしてこの長詩を作者はひそかに隠し持っていたらしい。最後の全集の時に初めて公開されたのである。そういえばこの「エリアンの手記と詩」もまた『抒情の論理』の編集の際に作者が隠し持っていたかのように持ち出されたと言われ、

いずれも作者が愛着をもっていったことの証明であると思われる。

この「エリアンの手記と詩」のモチーフと時代背景について、作者自身がその冒頭ではっきりと書いている。

「エリアンよ、おまえが十六歳の時だ、覚えておくがいい 丁度おまえが商店の混みあった下町でそうだいザベル・オト先生のところで あのミリカを秘かに恋していた時だ」

「秋であった！蒼空が馬の瞳のように、やさしかった 窓のそばでイザベル・オト先生は詩を教えてくれたクルト・ハイニツケの詩 僕は閉ざされていた 心が問う者を見出さない遙かな海辺を彷徨っていた オト先生は僕の瞳を怖れてそらした 僕は生きる価値を怖れていた。いかに細かい計算をしても意識は死の方へ流れていった オト先生はやはりミリカを恋していたのだ 僕は知った！ オト先生はそつと潤った瞳を僕に向けたそしてまたそらした」

「エリアンの手記と詩」は作者によって仮構された恋の物語の要素は否定できないだろうが、作者自身当時、今氏塾で一人の女子学生に想いを寄せていたことは事実らしい。

この後。手記ではオト先生がエリアンに次のようなことを告げたことになっている。

「エリアンおまえはこの世に生きられない お前はあんまり暗い

エリアンおまえはこの世に生きられない お前は他人を喜ばすことが出ない

エリアンおまえはこの世に生きられない お前の言葉は熊の毛のように傷つける

エリアンおまえはこの世に生きられない お前は醜く愛せられないのだから

エリアンおまえはこの世に生きられない お前は平和が堪えられないのだから」

このことはこの手記の中でも有名な言葉であり、これまでもいろいろな人によって取り上げられてきて、さまざまに論じられてきたものである。エリアンはミリカからも先生からも疎外されていた。

わたしはこの詩を青年期のエリアンのナルシズムから読んでみたいと思う。エリアンはミリカに想いを寄せていた。しかしその想いは伝わらなくてエリアンは痛く傷ついていた。自己愛は他者から愛されることによって満たされるものである。そこでエリアンは二人の間にある差異を拡大しミリカから離れようとする。さらに自己を愛されないものとして自己呈示していく。

しかもエリアンはこの淡い三者関係の葛藤のなかで、尊敬するオト先生から批判されたように思いこんだのである。「エリアンお前はこの世に生きられないお前はあんまり暗い」と。

新しい春が来るとエリアンは遙かな北国に向けて旅立っていった。新しい学問をするために。そしてやがて酒を飲むことをおぼえ、寂しい女たちのある料理屋にも行った。またミリカによく似た緋色のスエーターを着た少女に会ったりした。そしてついにこんな詩を書くようになっていた。

「冷たい風よ！

見慣れない響きの訪問者よ！

戸の隙間から

わたしは視た

おまえの孤独な貌かたちを！

おまえには耳がなかった

蒼ざめて鋭くなった眼だけがあつた

小さな炭火のように

燃えているわたしの心よ

脅しかけるおまえの影から

たったひとつの温かさを守ろうとして」

北国の冷たい空の下でエリアンの孤独な心はさらに氷結していくようであった。私はこの詩句を「純粹疎外」の表現と読むのである。私とお前は疎外しあつたまままるで異形のものを見るように見つめあっているのではない。私はこの「エリアンの詩」の中に自己表現の極北をみるおもいがする。やがてこの後作者は「固有時との対話」を書き「マチウ書試論」を書くことになるからである。この手記と詩がそこに至るまでの重要な過渡期の作品だったのである。エリアンはエイリアン（異邦人）であり疎外者であった。

ここでイザベル・オト先生のエリアンへの手紙を引用してみたい。

「エリアンおまえはミリカを愛していると、病院の窓辺から送ったそうだが、ミリカがそれを受け取った時はおまえはもう北国へ旅立っていたと思う。ミリカはあの時すでに胸を病んでいたのだから、おまえとは反対の南の保養地にすぐ移された。エリアンおまえは私がミリカの方へ傾くのを大そう病んでいたようだ。それは真実だし、私も否定はしない。だが病んでいた妻を抱えての、私の様々な迷いや辛さはいかばかりであったか、それは幼いお前やミリカにはわからぬことであつた。私はミリカの疑うことを知らない無邪気さに救われていたのだよ。ただそれだけの事だ」

「おまえもミリカもただ夢のような美しい愛を考えているようだ。私はそれを祝福し、また限りなく尊くも思うのだ。だがおまえにもミリカにも生きることの現実がいかなるものかわかっていない。おまえの知っているのは魂の出来事だけだ」

「エريانお前は痛ましい性だ。おまえは誰よりも鋭敏に、哀しさの底から美をひきだしてくる。そしてお前はそれを現実におしひろげるのではなく地上から離して、果てしなく昇華してしまうのだ。それは痛ましいことなのだよ。お前は人の世から死ぬほどの苦しみを強いられる。誰でも人の世の現実はそのようなものだ」と決めている、その醜さ。なれ合い、それから利害に結ばれた絆——そんなものがお前には落とし穴のように作用する。なぜ落とされるかも知らない間に落ちて傷つくだろう。お前はきつとあらためて人の世を疑い直す。そうしてどうにもならなくなった時、また死を考えはしないかと寂しくおもうのだ。お前はイエスの悲しみを知っているだろう。そしておまえが自分の純粹さを守りつづけようと思うなら、イエスのように生きてはならないよ、それは死よりほかに術のない道だからおまえは聖パウロのように生きるがよい。コリント後書にあつたね。我らもし心狂えるならば神のためなり、こころ確かならば汝のためなり、エريانおまえはもしかするとパウロのように人間の弱さに則しながら、あの純粹さをたどっていけるかもしれない。もしかしておまえはそんな生い立ちの匂いがするように思うのだ。だが予言は卑しいことだ。おまえのまんまにゆくがよい」

「エريانおまえはミリカを愛しているだろうが、いろいろなことは考えない方がよい。心の状態だけをたいせつにしなさい。お前がミリカと結ばれるかどうか、それはおまえの考える程、簡単にはきめられない。運命がそれをむすべば結ばれようし、むすばなければそれまでだ。人の世はそうに出来ている」

このオト先生のエリアンへの手紙の中に、「エリアンの手記と詩」のモチーフがほとんど語りつくされている。途中にある「お前の知っているのは魂の出来事だけだ」ということばは、そのまま作者が愛読していたジイドの「アンドレ・ワルテルの手記」への批判にもなっている。そしてこの手紙の最後で先生が言う言葉が気になる。普通だったら愛する生徒の恋愛を応援するべきところをこの先生はむしろあきらめるように運命論を語っているのである。私にはここも不思議なところであった。また以下の言葉も重要な箇所である「イエスのように生きてはならないよ。(中略) エリアンお前はもしかするとパウロのように人間の弱さに則しながら、あの純粹さをたどっていけるかも知れない」このことばには深い思想と洞察が込められていると思う。吉本隆明には常に「英雄主義」に対する批判意識があるからである。マタイ伝を批判した「マチウ書試論」にもそれがひそんでいたのである。

「エリアン！」

おまえはまだわからないのだ

おまえの求めているものが

天上のものか地にあるものか

それから

おまえの想うひとりのひとが

はたして

そのように美しい魂なのか……」

この言葉にはすでに先生にはエリアンが求めているものが天上のものか地にあるものかがわかっていて、エリアンが想う人がそのように美しい魂のひとつかどうかも分かっているような気がしてならない。これは私の深読みだろうか。ここには自由派だった先生と戦中派だったエリアンとの差異がえがかれているかもしれない。

ミリカの手紙の最後の部分も印象的であった。

「エリアンは今頃なにおしているでしょう まぶしい午後です ずいぶん遠いところ チーレルのお山のまだむこうのお山のエリアンへ！」

このことばでこの作品をしめくくるところに、エリアンのミリカへの夢と幻がえがかれている。当時青年に愛唱された詩があった。

「山のあなたの空遠く

幸住むと人のいふ

ああ、われひとと尋めゆきて

涙さしぐみ、かへりきぬ

山のあなたになほ遠く

幸住むと人のいふ」

上田敏がこの詩の入った「海潮音」を翻訳したのは、一九〇五（明治三八）年であった。吉本隆明の塾の先生だった今氏乙治はその三年前に生まれていた。今氏乙治は早稲田大学の英文科を卒業していたのに、なぜか塾の講師をしていて、そこには吉本隆明や北村太郎や田村隆一なども来ていたという。そして塾の授業料は生徒の自

由にしていたという。大変な博識で、高校生までの全科目を教え、さらに水泳や野球までも教えていたという。

四

最近、吉本隆明の塾の先生だった今氏乙治が生前書いた詩と散文をまとめた「今氏乙治作品集」のコピーを読むことができた。そのなかに「よるのひと時」という詩がある。

「不思議 不思議 おかしな不思議

この女 トランプをやっている――

しろい貌の、 ころもちあいた唇の

この女、 やや悩ましげな表情をして

それで 札をあがめてトランプをする

この女 この女 恋されている

あはよくば 恋人のもとへこの女

この女だ、 嫁いで 子を生み 老ひるのだ

不思議 不思議 おかしい不思議

この女の 俺の心の そして現実の

不思議 不思議 刹那の神秘だ

——よるのひと時

述べても 述べても ああ

いなぬこの不思議 これだけのこと

不思議だ全く。いぶかる心も」

まさに不思議な詩であるが、私が気になるのはこの詩の八行目の

「この女だ 嫁いで 子を生み 老ひるのだ」という一行である。ここを読んで、私が思い出したのは、「エリアンの手記と詩」の初めの方にある先生のことばである。

「オト先生はそつと潤った瞳を僕に向けた そうしてまた外らした——〈ミリカは早く嫁いで子供を生みたいと言っていたよ〉ということばである。すると六行目の「この女この女 恋されている」ということばも、「そうだイザベル・オト先生のところ、あのミリカを秘かに恋していた時だ」と一致することになりはしないか。あの「よるのひと時」という詩はオト先生（今氏先生）がよるのひと時に考えていた時の詩ではないかということである。「この女の 俺の心の そして現実の」という言葉もまた不思議な言葉であると思う。

のちに吉本隆明が当時の今氏先生とミリカのモデルになった女子高生についてこんなことをはなしている。

「その時は塾の先生にいろいろなことがあって、奥さんが病気であるとか、子供さんが小学校に通うようになってたけれど病弱であるとか、いろいろ内的なことも重なって、その先生がなんとなく女子高の生徒さんに好意を持

つみたいなことがあったのです。そういうのは敏感にわかります。「きれいということはないのですが、ものすごく早熟でした。学校は九段の、今もあるSという女子校に行っていましたがとても早く早熟だったのです。何十年かぶりに新聞で見たと行って会った時に、僕が何となくこれは違うなという感じになったのは、早熟の線上で精神的な枠組みがちゃんと広がっているみたいないイメージが、僕の方にひとりでできていたのだと思います。それはこちらの思いすごしだったなという感じをもちました。」（『吉本隆明が語る戦後五五年、わが少年時代と少年期』三交社）

今氏乙治が昭和二〇年三月の東京大空襲で亡くなっていなくて、戦後の素晴らしい吉本隆明の活躍を見ることができたら、何と言ったであろうか。そんなことを想いながらこのノートを終わりたいと思う。